

## カトリーヌ・マラーブの応答

カトリーヌ・マラーブ

訳＝西山雄二（東京都立大学）、

渡名喜庸哲（立教大学）、馬場智一（長野県立大学）

### 郷原佳以への応答

非常に素晴らしいテキストをありがとうございました。私の本を深く理解され、私の主張を尊重していました。言及された日本の小説は知りませんでしたから、さっそく読んでみます、面白そうですね。マルタン・パージュの方は自著で参照して、知っているのですが。

私がクリトリスを特権化しているかどうかには答える前に少し迂回をします。フロイトの精神分析における革命的な発想は幼年期です。セクシュアリティに幼年期があるという考え方です。子供にセクシャリティがあるだけでなく、セクシャリティに幼年期がある。幼年期から進化して成熟していく。これが精神分析の根本的な概念です。成熟に関して言うと、たとえば脳のような身体器官の成熟がありますが、子供が成熟して大人になっていくことは理解できます。教養や教育、モラル、所作の成熟……。ただ、この問いはかなり複雑です。セクシャリティの成熟とは何でしょうか。成熟した女性／男性になるとは？ 性的な意味で、子供が大人へと成熟するとは？

この問いに関して、フロイトの回答には問題点があります。サルトルのような男性的スタイルでの回答ばかりなのです。フロイトによれば、少女の成熟とはクリトリスを諦めることです。クリトリスは女性のセクシャリティにおける未成熟な部分で、幼年期のままで自慰行為の段階に留まります。女性の成熟はクリトリス的快楽からヴァギナの快楽への移行とされるのです。

先ほど言及された「穴」の話ですが、エレヌ・ドイチュのような精神分析家も言うように、男性による挿入によって女性のセクシャリティが成熟する。男性器の挿入が女性器に形を与える。フロイトにとって、女性の性的成熟はクリトリス、つまり、幼年期や自慰行為の放棄であり、ヴァギナへの挿入によって自己形成がなされる。これは実に問題含みの主張です。

私はヴァギナに対してクリトリスを特権化したいわけではありません。クリトリスは幼年期のもので未成熟を示しているのか。それは誤った問いだと言いたいのです。クリトリスがとり立てて幼年的であるわけではありません。女性のセクシャリティには進化や成熟があり、他者との出会いによる成長があります。生物学的な成熟だけではありません。私はクリトリスを特権化してはいません。ヴァギナへの従属とは別の仕方と考えなければならないのです。

あなたが言われたように、クリトリスはいたるところにあります。私にとって成熟とは自分なりの快楽を見出すことです。規範にしたがって成長することではなく、どこにでも自分の快楽を見つけることです。

## 中村彩への応答

非常に素晴らしい質問で、実に見事なテキストです。二つ目の質問から答えます。まず、ご指摘をありがとうございます、スピヴァクのこのテキストは知りませんでした。議論の水脈に満ちており、私が本書で考えた方向性と同じです。

一つ目の質問について、長めに答えます。あきらかに、今日の精神分析はその存在意義が問われています。そのあらゆる考え方が、とりわけジェンダー理論の展開によって問い質されています。ジェンダー理論、つまり、アイデンティティの構築に関する理論によって疑問視されているのです。ジェンダー・アイデンティティの構築は、生来の解剖学的なアイデンティティとは異なります。性とジェンダーのあいだにはあらゆる構築がありえます。社会的・心理的に構築されたアイデンティティは性の二元性とは合致しません。

フロイトもラカンもそうしたジェンダーの可塑性を認めています。ただ限界はあり、フロイトの性理論では、あらかじめ男性性／女性性への傾向性があるとされます。ジェンダーの可塑性はオイディプス・コンプレックスを流動化するものの、この傾向性によって、主体には男／女の二分法が一挙に刻まれてしまいます。そこから異性愛の標準、モラル、倫理が導き出されます。

逆の場合も然りで、男女の二分法を否定する場合も事情は変わりません。ラカンは性的差異はなく、男も女も同じものを欲望すると言いますが、しかし、欲望が向けられる対象はファルスです。結局、男女の二分法への回帰です。ファルスはペニスではありませんが、いずれにせよ、男性的器官です。精神分析家たちが男女の二分法を認めないときでさえ、ファロスの体制を特権化しがちなのです。

質問に答えますと、精神分析はジェンダー問題を抱えている主体の手助けにならないというわけではありません。精神分析は必要で、解放の力ももっています。しかし、精神分析自体が変容する必要があります。無意識の概念は非常に可塑的で広大ですから、ジェンダーに即した精神分析の変容は可能かと考えています。